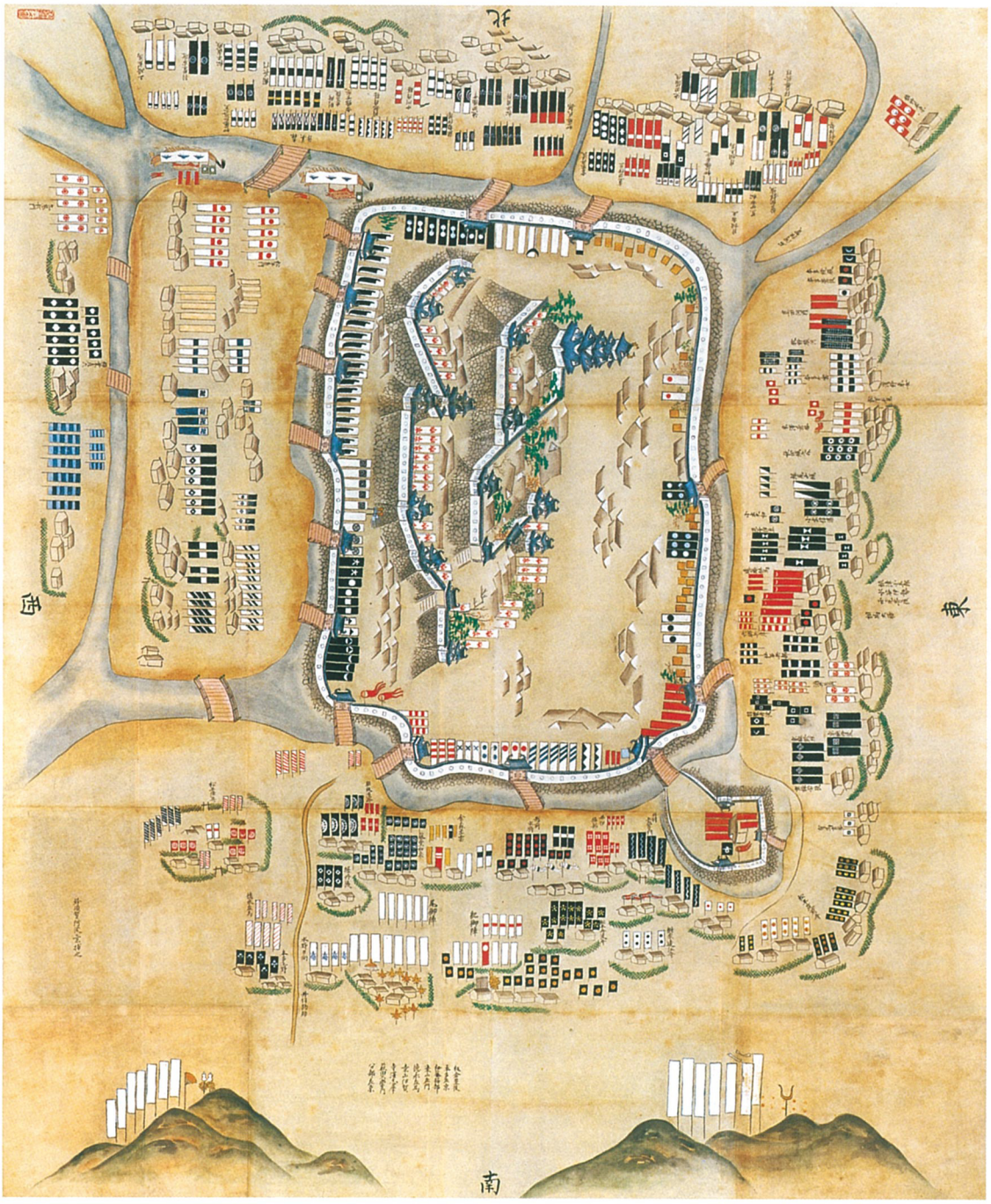


◆絵図のいろいろ　大坂冬陣備立之図（解説八ページ）

蓬古

HÔSA

NO.62

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

一．初代尾張藩主徳川義直と蓬左文庫1
―徳川義直の編纂書・蔵書―
四月十五日～五月十日
五月十三日～六月十一日

二．初代藩主徳川義直と蓬左文庫2
―徳川義直とその時代の歴史書を中心に―
七月八日～八月九日
八月十二日～九月十日

初代尾張藩主徳川義直（一六〇〇～五〇）は、慶長五年（一六〇〇）十一月二八日に、徳川家康の九男として大坂で生まれました。母は石清水八幡宮の祠官志水宗清の娘お亀の方（のち相応院）でした。慶長八年に甲府城主として二五万石の領地を与えられ、慶長十二年に兄松平忠吉の無嗣絶家のあとをうけて、初代尾張藩主となります。

元和二年（一六一六）の徳川家康の死去とともに、徳川義直は尾張に入国してのち、家臣への領地給与、法令の制定、入鹿池・木津用水の造成による新田開発など、尾張藩政の基礎を固めました。

また、文教政策を重視した徳川家康の影響をうけた徳川義直は、学問を好み、儒教を奨励し、学者たちを招き、多くの書物を収集するなど、尾張藩の学問・文化の面でも基礎を築いたといえます。

蓬左文庫の前身である、尾張藩の御文庫もまた、初代藩主徳川義直が、父家康の没後にその蔵書約三〇〇〇冊（駿河御譲本）を相続し、さらに漢籍を主に日本の古典なども積極的に収集したものが基礎となったのです。

徳川義直生誕四〇〇年を迎えた本年前期の展示は、「初代尾張藩主徳川義直と蓬左文庫」と題して、二回にわたって、蓬左文庫所蔵の資料の中から紹介します。

◆徳川義直の編纂書・蔵書

駿府城の徳川家康のもとで十七才まで過した徳川義直は、父家康の学問好きの影響をうけ、早くから書物に関心をもっていました。元和元年（一六一五）七月に、十六才の義直は、大坂夏陣出征の帰途に京都で二八件二四五冊の書物を購入しています。『論語集解』をはじめとした中国の古典、『東鑑』などの日本の歴史書を中心に購入されました。現在もその内九件六〇冊が蓬左文庫に所蔵されています。

元和三年には、徳川家康が収集した駿河文庫約一万冊のうちから約三〇〇〇冊が義直に贈られました。金沢文庫旧蔵書や朝鮮古活字本など大変貴重な書物が含まれていましたから、義直の蔵書は非常に充実したものとなりました。

徳川義直の書物収集は、寛永年間（一六二四～四三）にもっとも活発に行なわれました。当時中国で出版された新刊本を多く購入し、各分野にわたる中国の古典が集められました。数は少ないながら日本の古典も、基本的なものが収集されています。

また、種村肖推寺、角倉素庵・平次父子、金地院崇伝、林羅山、堀杏庵などから徳川義直に献上された書物にも貴重なものが少なくありません。経歴不詳の種村を除けば、角倉はじめ、いずれも当時有数の学者・文化人で、義直の学問にも大きな影響を与えた人々です。

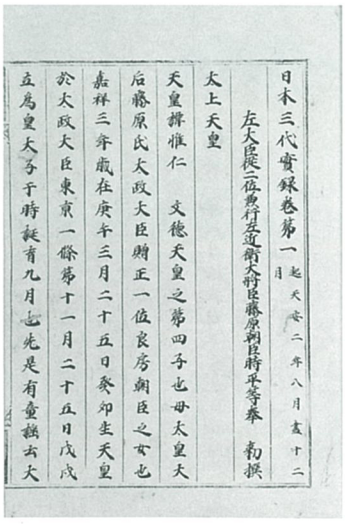
なお、寛永年間は、徳川義直が、編集事業に本格的に着手した時期にあたります。収集した書物と、堀杏庵ら側近の学者らの調査・研究によって、神道、儒学、歴史、兵学、徳川家康の伝記など、十数件の編纂書がまとめられています。

徳川義直が死去した際の蔵書は、約一万九〇〇〇冊と推定されており、質量ともに、尾張藩御文庫としての体裁を整えていたといえましょう。

◆徳川義直とその時代の歴史書を中心に

徳川義直の生き抜いた時代は、関ヶ原の戦いで徳川家康が覇権を勝ち得たのち、江戸幕府の創設、大坂の陣における豊臣氏の滅亡と続き、戦国期以来の激動の名残りが残る時代でした。徳川氏による新体制確立のため、一門の有力大名として義直に期待された役割は大きかったのでした。それがかえって、将軍権力の確立をめざす三代将軍徳川家光との緊張関係を生んだともいえましょう。

他方、徳川義直は、初代尾張藩主として、名古屋城・同城下町建設、家臣団の組織、領国統治の枠組など、尾張藩制の基礎を固め、後世藩祖と仰がれた存在でした。したがって、徳川義直の事績については、多くの伝記や歴史書がつくられました。義直の生きた時代を描いた歴史書も加えて、蓬左文庫所蔵資料のなかから紹介します。


日本三代實録卷第一　起天安二年八月盡十二月
左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰
太上天皇
天皇諱惟仁　文德天皇之第四子也母太皇太后藤原氏太政大臣贈正一位良房朝臣之女也嘉祥三年歲在庚午三月二十五日癸卯生天皇於太政大臣東京一條第十一月二十五日戊戌立爲皇太子于時誕育九月也先是有童謡云大

日本三大実録（角倉献上本）

名古屋市蓬左文庫出版物のご案内

名古屋市蓬左文庫では、下記のような出版物を刊行しております。研究調査の一助として、どうぞご利用ください。出版物は、蓬左文庫窓口で販売しております。また、一部絵図類を除き、郵送でもお買い求めいただけます（現金書留利用の先払）。その場合、代金のほか、送料が別途必要となります。また、在庫僅少のものもありますので、くわしくは、前もって下記にお問い合わせください。

（1）所蔵資料図録・解題・目録

出　版　物　名	販売価格(円)	内　　容
蓬左文庫図録	1，5００	代表的な蔵書など80点の図版・解説。カラー図版25点。
善本解題図録1～3（分売可）	各3００	代表的な蔵書の解題（白黒図版付）。（1）和書30種。（2）漢籍37種。（3）奈良・平安時代成立（鎌倉～江戸期写）の古典30種。
名古屋市蓬左文庫国書分類目録	4，０００	所蔵資料のうち、昭和25年以前受入の国書類を収録。
名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録	3，５００	所蔵資料のうち、昭和25年以前受入の漢籍・準漢籍類（朝鮮本含）を収録。
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録	2，５００	所蔵資料のうち、古文書・古絵図および小笠原家伝書・山田千疇旧蔵書・小酒井不木文庫・洋書を収録。
尾崎コレクション目録1～3（分売可）	各1，５００	尾崎久弥旧蔵書目録。（1）洒落本・滑稽本など江戸文学中心、約4，400点を収録。（2）明治以降の活字本など約5，000点を収録。（3）複製本・展観目録・雑誌など約5，000点を収録。
堀田文庫蔵書目録	５００	津島の堀田家寄託文庫の目録。国学・和歌関係など約1，050点を収録。
蟹江慶次郎旧蔵書目録	５００	地元の教育者蟹江慶次郎氏旧蔵書目録。和書・漢籍など約3,200点を収録。
雑賀重良旧蔵書目録	5，０００	地元の和歌書収集・研究家雑賀重良氏旧蔵書目録。約18，000点を収録。

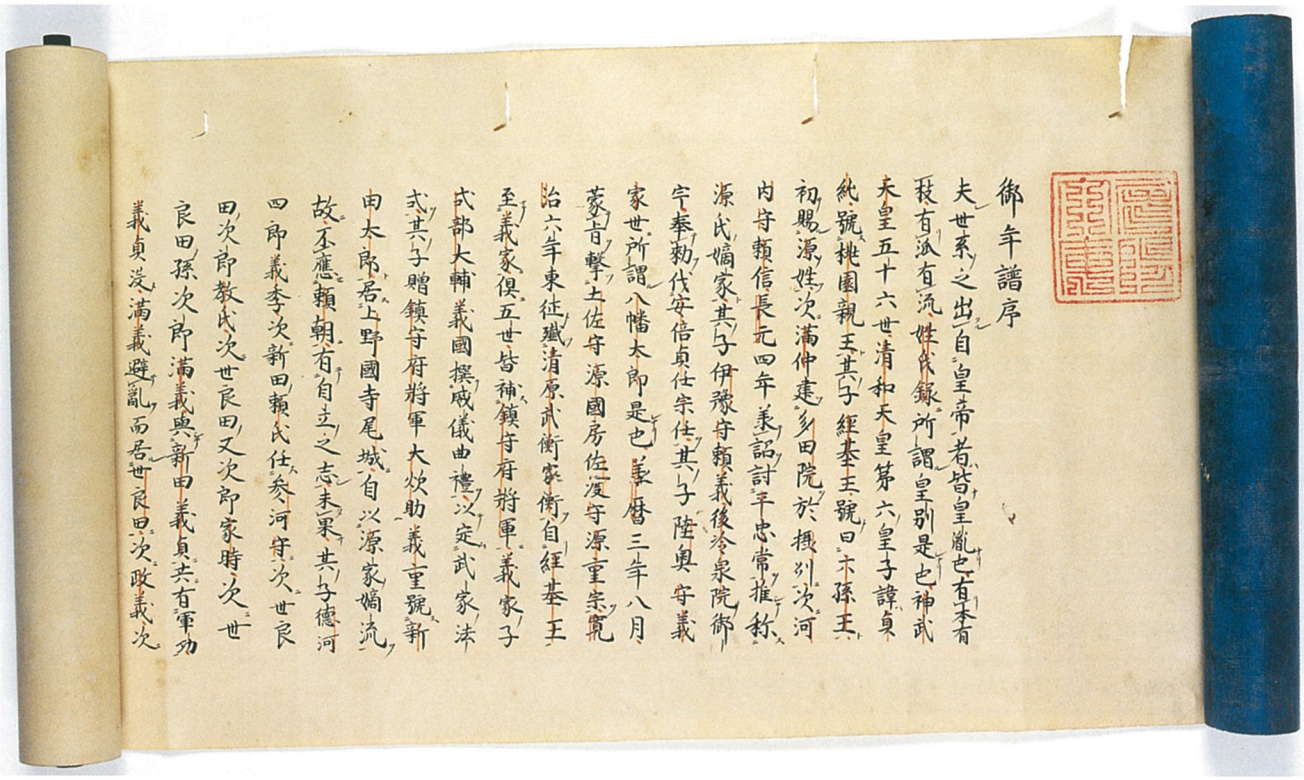
（2）名古屋叢書（正編、続編は索引をのぞき品切です）

名古屋叢書三編（分売可）	各3，０００	各巻内容は下記参照
1	尾張徳川家系譜	尾張徳川家とその分家の系譜を収録。
2	尾藩世紀　上	幕末の尾張藩士阿部直輔による尾張藩の通史。（上巻）本文全文収録。（下巻）不載資料「御年寄勤務年表」ほか参考資料を収録。
3	尾藩世紀　下	
4	士林泝洄続編	慶長5年～元禄6年の尾張藩士の系譜集「士林泝洄」の続編。
5	尾張年中行事絵抄　上	江戸時代の尾張で見られた年中行事を絵と文章で記録したもの。1～8月は高力種信、9月は小田切春江作（10月以降未発見）。東洋文庫所蔵本の影印と翻刻。（上巻）春之部正月～3月）・夏之部（4月）収録。（中巻）夏之部（5・6月）収録。（下巻）秋之部（7～9月）収録。
6	尾張年中行事絵抄　中	
7	尾張年中行事絵抄　下	
8	張州年中行事鈔・尾張俗諺・尾張童謡集	「張州年中行事鈔」－明和期の尾張の年中行事の記録。「尾張俗諺」－寛永～天保の尾張ことわざ集。「尾張童謡集」－こどものあそび・わらべうたを集めたもの。
9	松濤棹筆（抄）上	「金城温古録」の著者奥村得義の随筆から、尾張関係部分を抄出したもの。（上巻）近世初期の尾張と尾張藩に関する記述。（下巻）幕末の世相・風俗などの記録中心。
10	松濤棹筆（抄）下	
11	楽壽筆叢・十如是獨言	尾張藩書物奉行を勤めた河村秀穎の随筆等。
12	葎の滴諸家雑談・家事雑識	明倫堂篤学細野要斎が聞書を記録したものと身辺の事柄を記録したもの。
13	天保會記抄本	「尾張志」の編者深田正韶が主催した「天保会」の記録を細野要斎が抄出。
14	金明録	高力種信の日記。「猿猴庵日記」の名で知られ、江戸後期の尾張の風俗を活写。
15	尾張方言・水かはり[ほか]	名古屋・尾張の方言資料6編を収録。付：「江戸時代の名古屋方言索引」
16	横井也有全集　上	尾張の俳人横井也有の著作集。(上）発句篇・和歌篇。「ありづか」ほか。
17	横井也有全集　中	〃　（中）俳文篇・俳論俳話篇。「鶉衣」ほか。
18(1)	横井也有全集　下（1）	〃　（下1）連句篇・漢詩文篇。「木のみ籠」ほか。
18(2)	横井也有全集　下（2）	〃　（下2）狂歌篇・談義篇・伝記資料篇・追加篇・参考篇。
19	物品識名・同拾遺・乙未本草会物品目録・泰西本草名疏	水谷豊文著の和漢博物学名鑑「物品識名」など、尾張本草学を代表する4編を収録。カラー図版26Ｐ。
名古屋叢書三編総目録・索引		総目録、三編だより、士林泝洄続編家別人名一覧、総索引。
名古屋叢書（正編）総目録・索引	2，000	名古屋叢書全25巻（品切）の索引、総目録、名古屋叢書だより。
名古屋叢書続編索引	700	名古屋叢書続編全20巻（品切）の総索引。

（3）その他

名古屋市蓬左文庫絵はがき	300	「続日本紀」はじめ収蔵資料の絵はがき。カラー6枚入り。
書鎮	1，000	初代尾張藩主徳川義直の蔵書印「御本」印影をかたどった印判型書鎮。
古地図複製（郵送販売不可）	各1，800	1）尾府名古屋図　3）名古屋図　5）尾張図　6）愛智郡東　7）愛智郡西　8）春日井郡　9）知多郡　10）熱田　11）丹羽郡　13）海西郡　14）中島郡　15）葉栗郡。B全判。

お申し込み・お問い合わせ先…（052）953－2173　名古屋市蓬左文庫

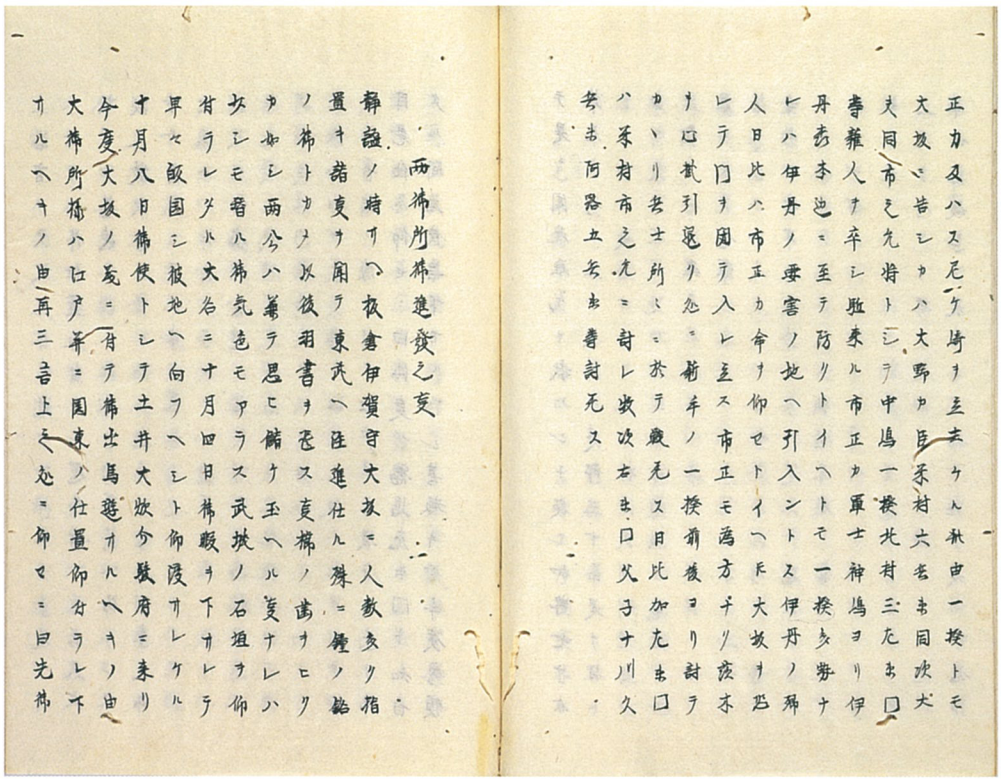


御年譜序

夫世系之出自皇帝者皆皇胤也有本有
枝有派有流姓氏錄所謂皇別是也神武
天皇五十六世清和天皇第六皇子諱貞
純號桃園親王其子經基王號曰木孫王
初賜源姓次滿仲建多田院於摂州次河
内守頼信長元四年義詔討平忠常推称
源氏嫡家其子伊豫守頼義後冷泉院御
宇奉勅代安倍貞任宗任其子陸奥守義
家世所謂八幡太郎是也義暦三年八月
蒙旨擊土佐守源國房佐渡守源重宗寛
治六年東征殲清原武衡家衡自經基王
至義家俱五世皆補鎮守府將軍義家子
式部大輔義國撰威儀曲禮以定武家法
式其子贈鎮守府將軍大炊助義重號新
田太郎居上野國寺尾城自以源家嫡流
故不應頼朝有自立之志未果其子德河
四郎義季次新田頼氏任參河守次世良
田次郎教氏次世良田又次郎家時次世
良田孫次郎滿義與新田義貞共有軍功
義貞沒滿義避亂而居世良田次政義次

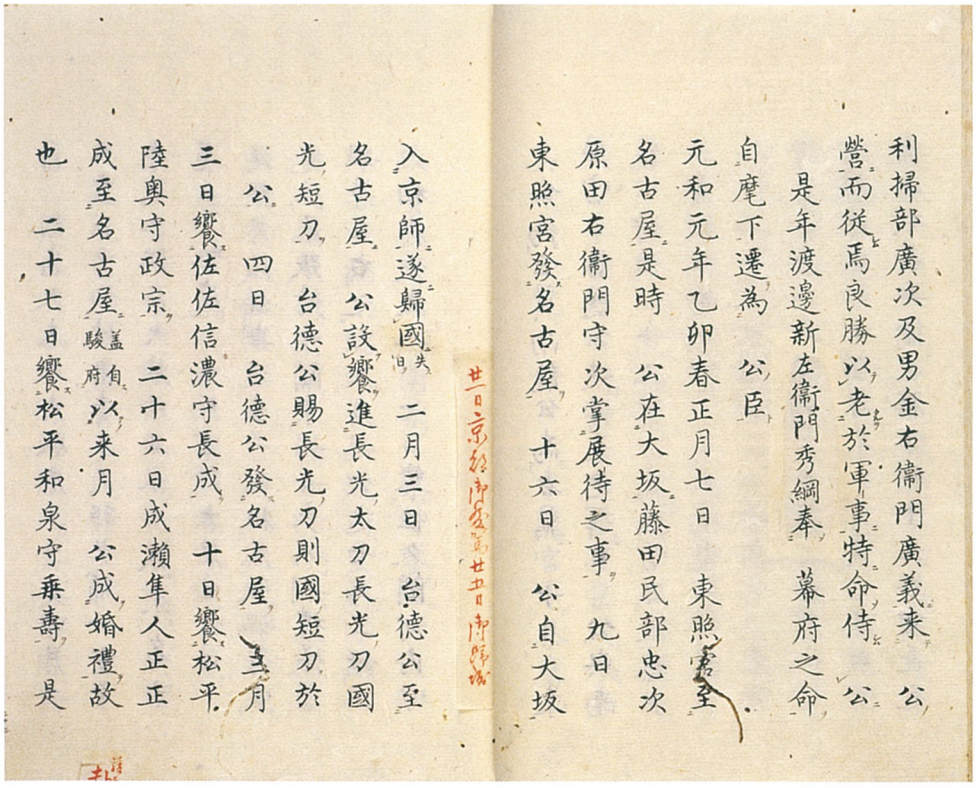
「御年譜」徳川義直が編纂させた父 徳川家康の年譜

「呉姫百媚」中国江南地方の美人画集



「当代記」江戸幕府の創設者 徳川家康の伝記

「敬公実録」初代尾張藩主 徳川義直の伝記



熱田町民と連歌

みつ汐の入江や谷の秋の声
紹巴『富士見道記』

室町・戦国期の熱田は、都と東国を往還する道筋にあたり、同地の社家・僧侶のなかには当時流行の連歌をたしなむ者が多かった。そのため、東西を往来した連歌師が、熱田社参詣のついでに招かれて、連歌会がしばしば開催された。柴屋軒宗長（一四四八～一五三二）、宗牧（一五四五没）、紹巴（一五二四～一六〇二）らの紀行文などに、その記事がみられる。

旅する連歌師たち

宗長は、大永六・七年（一五二六・七）の両度熱田を訪れ、六年には旅宿先の滝の坊で連歌会が開催され、織田筑前守良頼や神官らが参加した。翌七年も同じく宿坊の滝の坊で連歌会が開催され、坂井摂津守村盛らが参加した（『宗長手記』など）。滝の坊は、現在滝之寺（名古屋市熱田区白鳥町）と称されているが、当時の住職良温は連歌の愛好者として有名となる。

宗牧の場合は、天文十一・三年（一五四二・四）の両度に熱田を訪れ、十一年には滝の坊を訪れている（「宗牧句集」）。十三年にも滝の坊で連歌会が開催されたが、熱田大宮司千秋季光が戦死した直後で開催を遠慮する宗牧に対して、織田信秀が連歌会開催を勧めた結果と伝えられている（『東国紀行』）。

以上のように、宗長・宗牧の時代の熱田における連歌会の参加者は、滝の坊をはじめとした僧侶・社家のほかは、清須三奉行の一人織田筑前守や小守護代坂井摂津守村盛といった上級武士の名しか挙がっていない。

ところが、紹巴の永禄十年（一五六七）の熱田への旅となると、状況がかなり変化してくるようである。たしかに、宗長と同じく滝の坊を旅宿としたり、八月五日に座主御坊（熱田神宮寺座主、明治維新で廃絶）、七日に法花堂本遠寺（熱田区田中町）、十二日に熱田社社僧嘉祐と行者持宝坊、十三日に阿波手の森門前の妙勝寺という具合に、僧侶たちによる連歌会が相次いで開催されている点は、前代と変わらない。

しかし、七月末に紹巴が知多郡大野から熱田に急ぎ赴いたことの理由として、「来相（時宗の僧侶）ばかりいざなひて熱田に入て。急げるは。加藤全朔駿河へ下りけるを。延引しての会とて。度々むかひのあれば也。」とあって、熱田の加藤全朔が駿河行きを延期してでも連歌会を開催しようと紹巴を熱心に招いたからであった。加藤全朔は、海上交易も営む豪商で、熱田の有力町民として知られる。紹巴が、僧侶・社家だけではなく、熱田の町民の招きもうけて、熱田を訪れた点に注目したい。

加藤全朔と連歌

熱田の加藤氏は、鎌倉幕府御家人加藤景廉の子孫と伝えられ、景繁の子、順光（一五四七没）・延隆（法名全朔、一五七一没）兄弟の代に東西両家に分かれて海上交易や金融業を営む一方で、漁村が点在する海浜部に一族の屋敷や寺院を建設するとともに、道路を整備し、町並みを造成するなど、熱田の町が将来発展する基礎を築いた。

西加藤家の家祖となった全朔（延隆）は、熱田の西よりの海岸、大瀬子浦に屋敷を構えたが、同地はのちに「城之内」と呼ばれており、「城」の名にふさわしい堀・土塁をめぐらした屋敷であったと想像される。屋敷周辺に住む漁民たちは、全朔の営む海上交易にも動員されたであろう。尾張の支配者織田信秀・信長父子にも接近して商売上の特権を保証されるとともに、織田氏の熱田支配に協力している。しかし、永禄十年（一五六七）当時、信長と駿河の今川氏真は敵対関係にあり、その状況の中で全朔が駿河へ赴くことを予定しているのは、織田氏の支配の枠に縛られない豪商としての活動のスケールの大きさがうかがえよう。

加藤全朔は、早くから連歌を愛好していたようで、熱田社に奉納された連歌作品のうちで、天文十五・六年（一五四六・七）、永禄三年（一五六〇）、永禄四年、永禄六年の連歌作品にその名がみえる。とくに、最も早い「天文十五・十六年千句」では、延隆の名で第一の百韻の発句を詠んでおり、当連歌会の亭主（出資者）というべき役割がうかがえる。この連歌会には、前述の滝之坊住職良温や熱田社社僧嘉祐らが参加しているほかに、全朔の長男資景（景隆）や次男元隆の名もみえている。

加藤全朔は、「近年連歌数奇他に異なり、源氏・狭衣広学に堪へず、安得に及ぶべきは何ぞ哉」と、近年連歌に熱中しているが、連歌の教養として重視されていた「源氏物語」「狭衣物語」を広く学ぶことができないので、何か手軽に学べる参考書はないかと探していたという。尾張の連歌師岡田堅（賢）桃（一四九四生）はそれを聞いていたので、永禄六年（一五六三）に堺で「連歌寄合」（恵俊著、連歌作法書）を見つけ、全朔のために書写したと、祐徳稲荷神社所蔵中川文庫本「連歌寄合」の奥書に記している。この史料を紹介された辻村全弘氏は、さらに、全朔の作句には『源氏物語』の面影を詠じているものがみられると指摘されている。（注）

したがって、加藤全朔の連歌愛好は、賢桃と親交のあった、都の連歌師たち、宗牧や紹巴などに広まっていたであろう。なお、連歌を愛好した熱田町民は全朔一人にとどまらなかったことは、次節に紹介

するとおりである。

紹巴と熱田町民

加藤全朔の兄、東加藤家の順光は早くに亡くなったが、その子図書助順盛（法名順政、一五四四～八八）は、熱田の東の精進川口の中島、「羽城（はじろ）」を購入・開発して、屋敷とした。江戸期の絵図にも、屋敷のまわりに堀・土塁をめぐらした様子がうかがえる。羽城の一角にある「舟津」は、舟の出入りする港となっていた。紹巴も『富士見道記』に、「（八月）十八日。大高城より水野防州（周防守）迎舟を加藤庭にをし入たり。図書助の舟二艘ならべたるに」と、屋敷に直接舟で出入する様子を記している。

「（八月）四日には加藤図書助（順盛）の新地の構えまで。海堀上たる松陰ちかく有て。出入汐はやき所なれば」と、紹巴は加藤順盛が新たに構えた羽城の屋敷を訪れ、本稿冒頭に掲げた句を詠んでいる。おそらく、叔父加藤全朔も参加した連歌会が開催されたのもこの時であろうか。東西両加藤家を挙げて、紹巴を招いての連歌会開催であったと考えられる。こののち、加藤全朔が駿河へ出発したため、甥順盛が代わって、紹巴一行の接待や、近隣に赴く際の送迎を世話しているのである。

加藤氏一族のもてなしぶりは華やかで、『富士見道記』のなかでも際立っているが、紹巴一行をもてなした熱田町民は加藤氏一族にとどまらない。

（八月）九日には竹田小兵衛とて去年昌叱（しょうしつ）かりの宿をもせし人なり。庭に葛茂らせ。山ざとびたる所にて。

真葛はふ庭に松虫声もかな

八月九日に紹巴が宿泊した竹田小兵衛宅は、昨年永禄九年に、紹巴の娘婿里村昌叱も宿泊したところであるという。

竹田氏一族も戦国期熱田の有力町民であり、熱田幡屋（はたや）にあった地蔵院（一三一七創建）を、天正四年（一五七六）に同田中に移転再興したとの由緒が伝わっている。天正二十年（一五九二）の『熱田神領大宮司千秋家持分屋敷方色成方地子方納帳』（熱田神宮蔵）によれば、田中の竹田小兵（衛）は、色成三八〇文を千秋大宮司家へ納めている。また、天正十九年の史料でも田島口に田を所持しており、竹田小兵衛はかなりの土地持ちであった。昌叱・紹巴を宿泊させた小兵衛本人か、あるいは近親者であろう。同じ熱田の市場・中瀬の両町にも一族がすんでおり、「紙屋」という屋号をもつ富裕な商人の一族であり、熱田の町を代表する有力町民といえる。紹巴の記事にも、町並みの中で、葛を茂らせた庭をもち、山里めいた風情をたたえる竹田小兵衛宅は、いかにも趣味豊かな富裕な町民の住居の様子がしのばれる。紹巴は、前年に訪れた娘婿昌叱から・竹田小兵衛はじめ熱田町民たちの連歌愛好の様を詳細に聞かされていたとみてまちがいなかろう。

熱田町民から歓待をうけた紹巴一行も、ようやく熱田を出発する日が近づき、名残りの宴がもたれる。

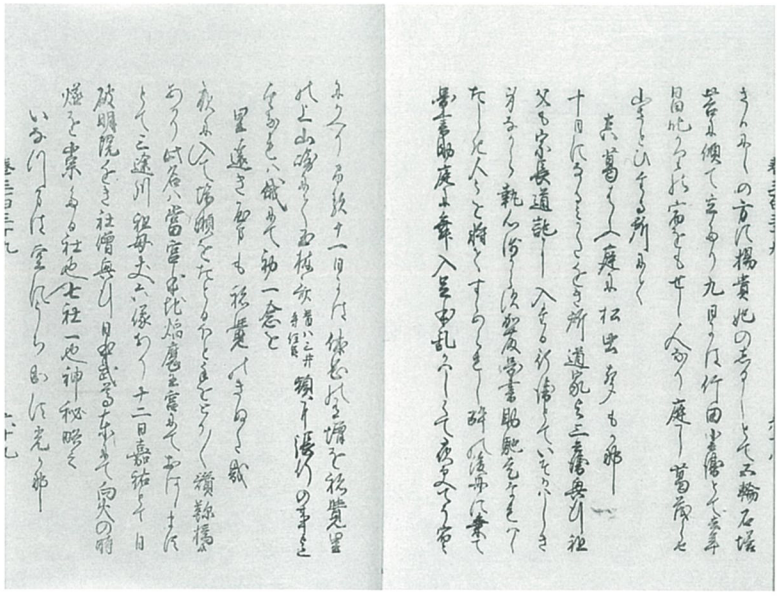
又山崎城より玉林斎来たり給へり。力をえて安堵せり。浅井四郎左衛門など酒もたせて夜を深しぬ。

この浅井氏も、熱田の有力町民である。須賀の町の浅井杏庵家が最も有名であるが、紹巴に酒を贈った四郎左衛門は、中瀬に居住する中瀬浅井家四代当主四郎左衛門（一五七六没）と思われる。浅井氏は、熱田町民として室町期までさかのぼる、最も古い由緒を誇る一族である。

加藤・竹田・浅井氏と、当時の有力熱田町民が連歌師紹巴を歓待し、連歌会を開催する。前代の宗長・宗牧の熱田訪問に際しても、彼らと交際した町民がいたかもしれないが、彼らの記録には記されることはなかった。他方、紹巴・昌叱には連歌愛好の熱田町民の姿は、魅力ある存在と映ったにちがいない。連歌愛好という面をとっても、十六世紀後半に入って、熱田町民の台頭がみられる点で、港湾都市熱田町民の経済的成長を明確に指摘できよう。

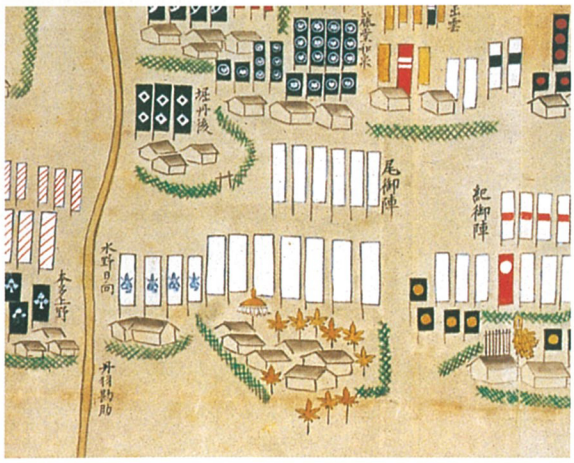
（下村信博）

注　辻村全弘「文人加藤全朔とその周辺」『あつた』一八一号。熱田の連歌について教えられることが多かったことを感謝します。



「富士見道記」（『群書類従』所載）

◆絵図のいろいろ（表紙口絵解説）



大坂冬陣備立之図（図347）
江戸時代写　99.0×122.5cm
（部分・徳川義直陣）

慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣で、大坂城に籠城する豊臣勢と、それを包囲する徳川勢の陣地配置の状況を描いた絵図である。慶長十九年の有名な方広寺鐘銘事件を契機とした徳川家康からの挑発、豊臣氏側の牢人募集などによって、両者の関係は険悪となり、豊臣秀頼の守役であった親徳川派の片桐且元の大坂城退去により開戦となった。豊臣氏は、真田信繁（幸村）・後藤基次ら牢人を入城させ、約一〇万の兵力で大坂城に籠城したといわれる。しかし、豊臣氏の期待に反して福島正則・黒田長政ら豊臣恩顧の大名すら豊臣氏に味方するものはいなかった。

徳川家康は、諸大名に出陣を命じ、十月十八日に大坂城の南にある茶臼山の本陣に入った。約二〇万といわれる諸勢は、次第に大坂城に接近し、十二月には同城を完全に包囲する体制をつくり上げた。本絵図も、こうした大坂城攻囲の状況を描いたものと考えられる。なお、十二月二十日には二の丸・三の丸の石垣・堀の破却などを条件に、和平が成立し、冬の陣は終了する。

本絵図は、縦横十二枚の紙を貼り継いだうえに、大坂城をはじめ、両軍の陣営や旗・馬印などが彩色をほどこされて絵画的に表現されており、武将名を記すだけの通常の陣立図に比べて、華やかな感じを与える。大坂城内の豊臣勢については武将名が注記されていないが、旗・馬印などで武将名が判明する場合もある。大坂城の南東角に島状に突き出ている曲輪は、真田信繁が築いて十二月四日に松平忠直・井伊直孝・前田利常勢を撃退した「真田丸」である。同所に立つ黒旗に描かれている「雁金」の紋は、真田家の紋所としてしられている。他方、南端の西側の山上に立つ金扇は、大御所徳川家康の馬印で、その本陣である茶臼山を示し、東側の山は、将軍徳川秀忠の本陣岡山である。どちらもその名が注記されていない。両本陣のすぐ北にある、「尾本陣」「紀本陣」は、家康九男で尾張藩主徳川義直と、同十男徳川頼宣（当時は駿府城主）兄弟の陣営である。徳川氏一門は清和源氏出身ということで白旗が描かれている。

当時十五才の徳川義直にとって、冬の陣は初陣であり、率いられた約一万五〇〇〇の尾張藩勢にとっても、その陣立での地位が、のちに藩士としての序列を左右するほど、尾張藩では重視されたといわれている。蓬左文庫の合戦図のうちには、冬の陣三点、夏の陣五点があり、関心の高さをうかがわせる。なお「尾御陣」という注記からすると、尾張藩外で本絵図が成立した可能性もあり、その伝来については今後も検討する必要があろう。

蓬左文庫は、蔵書点検のため、下記のように休館させていただきます。
期間　平成12年6月13日（火）～6月25日（日）

名古屋市蓬左文庫

〒461-0023　名古屋市東区徳川町1001番地
TEL（052）935－2173

◆交　通
名古屋駅、栄より
市バス（基幹バス2番）・名鉄バス（「本地ヶ原方面」行）
「新出来」下車、徒歩5分
大曽根より
ＪＲ中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間　午前9時30分～午後5時
休館日　毎月曜日、第3金曜日
祝日（日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館）
特別整理期間（2週間）
年末・年始（12月28日～1月4日）
閲覧　館内のみ。館外貸し出しはいたしません。
閲覧時間　閉架図書　午前9時30分～12時
午後1時～5時
開架図書　午前9時30分～午後5時
複写サービス　保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行います。
電話・郵便による申込みも可。
取扱い時間　午前9時30分～12時　午後1時～5時
展示　所蔵資料のうち30件程度を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。

「蓬左」第62号　☆平成12年3月31日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫（名古屋市東区徳川町1001番地）
☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源印刷工業（株）　※この冊子は再生紙（古紙配合率100％，白色度80％）を使用しています。